

扇や通信

'08-'09

秋・冬
号



空が高くなつて、どこまでも透き通つてくると、あだたら高原の秋が一日と深まります。

栗や山ぶどう、あけび、きのこなどの山の幸をもたらししてくれた森もやがて冬の眠りにつきます。安達太良は頂きに白い帽子をかぶり、薄紫の野菊が秋の終わりを飾つて、高原の冬がやってきます。まもなく森も高原もふんわり雪に包まれて…。

この季節は、大気も澄み切つて、散策や観光にはいちばんおすすめの時。お食事も、豊かな山の幸、里の幸がお膳を彩ります。冴え渡る月を眺めながらの露天風呂、雪見の酒もまた格別…。どこぞでゆつくりお出かけください。

今回は、扇やからの散策が一味楽しくなるお話をさせていただきます。秋から冬の、清らかな日さしの中、小さな旅も楽しんでいただければ幸いです。

女将 鈴木亜矢



栗の精が山から やつて来た

栗長者のおはなし

昔々、安達野の里の家々を、栗がどつきり入ったかごを背負つて、小さな女の子が訪ね歩いていました。女の子は「この栗と、お椀一杯のお米ととりかえてもらえねえべが…」といいました。「病気で寝てる母ちゃんに、おかゆ食わせてやりでんだ。おねがいします」—でもどの家も、ぴしゃりと戸を閉めてしまいます。

秋の日はたちまち暮れて、女の子は里の外れの最後の家に声をかけました。その家には、炭焼きの貧しい夫婦が住んでいました。夫婦は、「孝行な娘

だなあ、これ持つてげ」と、米びつをひっくり返してやつとお椀一杯分の米を差し出しました。女の子がおどろいて「そんじゃあ、おじさんとおばさんの米がなくなるべ」というと、夫婦はいいました。「なあに、俺らは丈夫で働ける。それより病気の母ちゃんにうまいかゆ、食わせてやれ」。

女の子は、栗のかごを夫婦に渡すと、わずかな米を大切に胸に抱いて、何度も何度も二人の家をふり返りながら、森の方に去っていきました。夫婦は、女の子が置いていった栗をゆでて夕飯にしました。

あくる日、炭焼きの女房がカラの米びつを持ち上げると、ずしりと重いです。ふしぎに思つてふたを開けてみると、なんと、米がいっぱい入っています。「あれは誰だつたんだべ!」おどろいた夫婦は、女の子が帰つて行った森に何度も行つてさがしましたが、どこしても女の子の居所を見つけれずとはできません。

ある日二人は、森のやぶの中を行く女の子の後姿を見つけてきました。「あつ、あの娘だ!!」夫婦が追いかけると、女の子はふり返つて「ふふふ」と笑つと、すつと大きな木の影に消えてし



まいました。その木は、枝いっぱい実をつけた栗の木でした。夫婦があつけにとられていると、また愛らしい声が「ふふふ」とひびき、風もないのにバラバラと雨のように栗の実が降ってきました。

「栗の精が来たんだなあ」夫婦はそういつて、木の幹をそつとなでて、手を合わせました。

それからというもの、夫婦の米びつはいくら飯を炊いても減ることはありませんでした。夫婦は、里に火事や洪水があつた時には大勢の人々の炊き出しをし、凶作の時にはみんなに米をわけ与えました。いつしか二人は「栗長者」と呼ばれるようになりました。

—あだたらの森を散策される時、もしどこからか「ふふふ」と可愛い笑い声がきこえたら、それはきつと栗の精です。

栗の木が、つややかな茶色の実をばらばらと地面に降らせる秋には、栗を一心に拾い集めている栗の精の姿が見えることがよくあるとか…。森で栗の木を見つけたら、そつとかくれて見ていてください。